

一般社団法人日本社会福祉学会第73回春季大会報告

全国大会運営委員春季大会担当
所 道彦(大阪公立大学)

大会テーマ : マンパワー不足のなかの社会福祉
開催日時 : 2025年5月25日(日) 13:00~17:40
会場 : 立教大学池袋キャンパス7号館

第73回春季大会は、2025年5月25日に立教大学池袋キャンパスで開催されました。

大会の冒頭、和気純子会長から開会の挨拶がありました。その中で、政府による会員の任命拒否に端を発する日本学術会議の法人化問題について経過報告がありました。日本社会福祉学会では、会員による署名活動などを行い法案の修正を求めてきたこと、法案は可決されたものの附帯決議の中に学術会議の独立性・自主性の尊重が盛り込まれていることなどの説明がありました。アメリカでも大学の自治、言論の自由、多様性への取り組みが脅かされるような事態となっている中で、社会福祉学の原点を再確認することが重要であると述べられました。

続いて、2024年度学術賞受賞者2名の講演が行われました。『子どもの「貧困の経験」-構造の中でのエージェンシーとライフチャンスの不平等』で受賞された大澤真平氏(札幌学院大学)は、高校教員から研究者となって、質的研究やエージェンシーに着目した研究を進めてこられた経緯をお話しになり、子ども自身の認識や貧困の経験をとらえること、構造の中でエージェンシーをとらえること、貧困問題解決に向けたポイントなどを説明され、複雑なエージェンシーの研究に取り組む意義を述べられました。

木原活信氏(同志社大学)は、受賞作『ジョージ・ミューラーとキリスト教社会福祉の源泉-「天助」の思想と日本への影響』の執筆の経緯をご自身の学生時代まで遡ってお話しになり、キリスト教との関わりや孤児院の設立などミューラーの人生、思想的特徴、そして、宣教の旅の中で日本に立ち寄り、その講演の記録をまとめた小冊子が山室軍平や石井十次に与えた影響について述べられました。

大会シンポジウムは、中島修氏(文京学院大学)、尾林和子氏(東京聖新会/ダブリン大学日本研究センター)、室田信一氏(東京都立大学)の3氏をシンポジストにお招きし「マンパワー不足の中の社会福祉」をテーマに行われました。なお、コーディネーター・コメンテーターは、所道彦(大阪公立大学)が担当しました。

中島氏は、地域における人材不足、特に民生委員・児童委員の欠員問題を中心にお話しされました。充足率に地域格差があること、地域への貢献という動機が強い中で有償化は解決策ではないこと、町内会・自治会の組織率が低下する中で推薦の方法を再検討する必要があること、高齢化が進む中、働きながら民生委員・児童委員ができるような工夫が求められていることなどをご報告されました。また、福祉現場が人材確保に苦勞する中で有料の職業紹介所が利益をあげている状況を指

摘され、福祉人材センターなどの役割の重要性を述べられました。

尾林氏は、AIやロボットなどテクノロジーの導入・活用の現状についてご報告されました。動画を使いながら、介護現場における見守りやコミュニケーションロボットの活用の事例を紹介され、エビデンスにもとづく実践の重要性、それを使いこなすための人間の役割や課題を論じられました。そして、ヒトを介するケアの意味について改めて考えることが求められていると指摘されました。

室田氏は、マンパワー不足の状況を専門性と脱専門職化という観点から検討されました。イギリスと同様の脱専門職化の兆候が日本でも見られること、マンパワー不足を背景に総合的な福祉人材の確保・育成が提起され、専門職には自分の専門性をこえた対応が求められる状況になっていること、ソーシャルワークが効率的な実践・消費主義的なものに変容していることなどの指摘がありました。

三氏に対しては多くの質問が寄せられました。コメンテーターからは、地域コミュニティが変容し、これまで前提としていた資源がなくなっていく中でのつながりのあり方、テクノロジーの進化のスピードと導入までのコスト、「相談」分野への影響と課題、労働やまちづくりなどマンパワー不足に関連した状況を直視し、現状維持バイアスに陥らないことが重要であると指摘させていただきました。

最後に、金子光一副会長から閉会の挨拶がありました。現在の社会福祉の課題に取り組むための新たなアプローチの必要性、理工系や自然科学系分野との連携などとともに、社会福祉学のこれまでに検証することの重要性にも言及されました。春季大会全体として、学術賞受賞者講演からシンポジウムまで充実したプログラムとなりました。ご参加いただいたみなさま、大会開催にあたりご協力いただいた関係者のみなさま、特に、会場の準備・設営からご協力いただきました立教大学の関係者のみなさまに心より感謝申し上げます。